

# 第十七期登山学校

## 第六回講座

### 「天気の見方」講座

第十七期受講生 寺田 亨

十一月三日(土)北浦和カールスポーツにて座学、十一月

四日(日)赤城山 鈴ヶ岳にて実技講習が行われた。

座学では、駒崎先生から天気の基礎と観天望気について講義をして頂いたが、

「空気がないと天気は起きない。」と言われても、まさに雲をつかむ様な世界で今一ピンと来ない。

水蒸気は気体で目に見えないこと、ヤカンの湯気が水蒸気でないとを教えて頂き、今更ながらに納得している自分にややがっかり。(小学生でも知っている?)しかし、空気に含まれる水蒸気と空気の流れで雲が発生し、天候が変わるといふ基本原理が納得でき少し満足。

天気図については(確か中学の授業でラジオを聴きながら書いた覚えがあるけれど)、天気記号を書く練習問題はとても役に立った。記号を書くのは簡単ではあるが、快晴、晴れ、曇りの定義とか、風力1とはどういつ状況なのかもわからない自分にまた失望。

天気図が理解できないのは、地図が読めないのと同じだと思うと、天気図の勉強

をしないとまずいと感じる。

観天望気については、シベリア気団、オホソク気団、揚子江気団、小笠原気団について、小松先生からも追加説明して頂き、各気団と雲の発生との関係がよくわかった。

雲については、観天望気の大事な手掛りとして、知っておかなければならないことがたくさんあることを痛感した。

翌日の実技講習は貸切バスを使って移動、赤城山 鈴ヶ岳の登山で行われた。

あいにく、当日は雲ひとつ無い快晴に恵まれ、「天気の見方」講座の実技、「観天望気」空を見上げて雲について学ぶ、には残念な天候となっていました。

十時頃には赤城山総合観光案内所前でバスを降りる。トイレ 恒例の準備運動を済ませ、鈴ヶ岳登山口に向かつて、舗装道路沿いに歩道を歩きはじめた。

目的地 鈴ヶ岳は標高1595m 新坂平登山口の標高は1420m標高差 175m 途中楢柄山の登り降りがあるので累積標高差は402m 歩行距離5km、コースタイム三十分の往路復路同一の行程である。

出発時点の天候は、雲量の快晴、風力1、気温五度と言ったところ。気持ちいい。またとない登山日和である。案内所を歩き出してすぐ右

手に白樺牧場が見えてくる。緑がすっかり無くなった放牧場が広々と広がり、その奥手の山裾には葉がすっかり落ちてしまった白樺林の幹と梢の列がずらりと並んでいてその壮観さに思わず写真を撮ってしまう。歩くこと、2、3分で、白樺牧場の外れにある新坂平登山口に到着。

我が班は、尾手先生、水谷先生、小松先生の三名の運営委員と男性三名、女性二名の計五名班員の総員八名で十時二十分、登山口を出発する。快晴の秋の澄んだ空気の中落ち葉を踏みしめて順調に進んで行く。一時間程で、楢柄山に到着。楢柄山山頂は展望が開けており、さっそく観天望気。飛行機雲が一筋ある以外は雲はひとつもない。西南西方向におそらく渋川であろう市街が見えるが、もやが立ち込めている。高気圧に覆われているため、大気の動きがないためであることを、小松先生が教えてくれる。

楢柄山頂からすぐに急な下りとなり、鈴ヶ岳へ向かう。水谷先生が下り方を教えて下さった。下りきって、鈴ヶ岳への登りの直前(大ダオ)で小休止。尾手先生から大福餅を頂いた。目の前には鈴ヶ岳山頂直下の岩場が控えているが、これで元気が出る。山頂直前の岩場では、再び水谷先生に登り方のアドバイス

を頂きながら、正午頃には鈴ヶ岳山頂に到着、昼食となった。天候が良いと気分が良いせい、行動すべてに余裕が出来る。昼食を食べながら、山での天候を読む力は地図を読む力以上に大事かも知れないと考えたりする。

昼食後、記念撮影を終え帰路は同じ道を戻る。急登だった頂上直下の岩場の下りに時間を取られながらも順調に帰路を行く。帰路の楢柄山での観天望気では、西南西、東北東の空に巻雲が出始め、西南西には飛行機雲も確認されたが、心なしかくつきりしていて、長く残っていた様に思う。天気図では温暖前線が接近しているとのこと。昨日の講義の前線と雲の図が頭に浮かぶ。雲を見て運営委員のどの先生も、「二日後は天気が崩れる。」という観天望気をされていたが、私にはまだ、なぜ二日後なのか分からない。まだまだ分からないことが多いことを痛感する。

赤城山総合観光案内所前に、16時30分頃着で実技講習登山は無事終了。登山道はアップダウン、岩場、鎖場と変化に富んでいて、尾手先生、水谷先生、小松先生の3先生のコンビネーションの良いサポートと、ペース配分絶妙の班長、頑張り屋の班員に恵まれ快適で充実した登山となった。

ところで、私達が登り始めた頃、中国河北(かほく)省の万里の長城では大雪で日本人ツアー客4人が遭難し、救出作業が行われていた。結局四人のうち三人の方が凍死されたが、前日には天候が悪化するのわかっていて、当日の朝、霧雨だったことから、雪が降っても強くなる前に戻れる」と判断し、予定通りツアーを行うことを添乗員とガイドが相談して決めたとのことである。さらに、ガイド含め五人のパーティで一人用の簡易テント一つだけしか用意しなかったとも報じられている。さらに残念なのは、亡くなられた三名の方とも初心者ではなく、六千級の山とか、冬山の経験を持たれた方もいらした様である。

人は間違いを犯すものだと良く言われるが、霧雨を見て中止していればとか、全員が簡易テントを持っていればとか、後になって考えれば当然のこと、現場ではどんなに経験を積んでも判断間違いをしてしまうものなのだろうか？

快晴の中、気持ち良く行って来た「観天望気」実技登山でしたが、同じ日に気象遭難のニュースを目にして、いろいろ考えさせられる講習となりました。ちなみに、二日後の新坂平

登山口の天気は霧雨、気温は低くは無いが、ガスがかかり見通しは十程度となった模様。

運営委員の皆さん、受講生の皆さん、お世話になりました。また次回の講座でもよろしく願います。